

---

# 散華

千颯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

散華

### 【Nコード】

N8629V

### 【作者名】

千颯

### 【あらすじ】

17歳の夏。オレは何よりも大切なものを失った。オレは、これから、何を思っ生きていけばいいのか・・・お前は、それを考えたことあるんか？・・・平次の重くて悲しい恋。（一部死にネタあります）

## 舞蝶

「か、和葉・・・大丈夫か？」

倉庫の中の荷物の後ろに何とか駆け込んで、和葉に声をかけた。

オレは犯人に銃で撃たれて、足と手を負傷している。

和葉は、多分かすり傷のはずや。

「・・・アタシは大丈夫・・・でも、平次が・・・。」

和葉が泣きそうな顔をして、オレの頬を撫でる。

ガタンっ

物を蹴る音がして、犯人が近づいてくるのが、気配でわかった。

(・・・オレが盾になって和葉だけでも・・・)

そう考えていると、急に和葉が中腰になった。

何かを伺っている真剣な横顔。

「かずは・・・？」

急に不安が押し寄せて、思わず声をかける。

和葉はそれにゆっくり振り向き、寂しげに微笑むと、

「・・・平次・・・。」

自分のお守りをオレにかけた。

「・・・アタシがきつと助けるから・・・。ごめんっ。」

ガンッ オレの怪我した足を思いつきり踏みつける。

「ぐわっ……」

悶絶するオレに、泣き顔でにっこり笑うと、

「……元気だな。」

そう言って、オレが止める間もなく、和葉は一直線に駆け出していった。

「かずはっ」

オレは寝そべったまま、それを目で追う。

犯人がすぐ和葉に気がつき、銃を構えた。

「やめっ、和葉あーーーーー」

パァンッパァンッパァンッ

撃たれた和葉が蝶のように舞った。

ふわり ふわり ふわり

それでも、和葉は何かを目指して走り続ける。

和葉の白い服が、赤い色に染まる。

「かずはーーーーー」

パーンッ

また銃声が響いた。

ふわり

また和葉が宙を舞う。

一度がつくり膝をついたが、和葉はまた立ち上がった。

「和葉っ、和葉っ、もうやめいっ！かずはぁーーーーー」

オレの叫びを無視して、和葉は泳ぐように壁にたどり着くと、何かを押して、壁にもたれかかった。

パンッパンッ その和葉にむかって、非情にも銃声が響く。

その時、

ガラガラガラガラガラ

倉庫のシャッターが開いた。

・・・そこには、銃声を聞いて駆けつけた、府警の刑事が、犯人に向けて拳銃を構えていた。

それを見て、和葉が崩れ落ちる。

「かずはぁーーーーーっ。」

オレの絶叫が倉庫内に響き渡った。

舞蝶（後書き）

！ 和葉は平次が動けないようにして、走り出しました。愛ですよ、愛

## 白羽

「和葉っ和葉っ和葉っ。」

オレは和葉の名を呼びながら、いざり寄る。

動かない足が邪魔やつ。

オレは、自分の足を殴りながら、前へ進む。

「かずは……。」

大滝はんの膝に抱きかかえられている和葉は、真っ白な顔をしていた。

けが人を見慣れている筈の大滝はんでさえ、呆然としている。

だらりとした細い腕をつたって落ちる、真っ赤な血。

「……和葉？」

耳鳴りがキーンとする。

すぐ近くで犯人を取り押さえる、刑事達の怒声も遠くに聞こえる。

「かずは……な……んで……。」

オレの問いかけにも、ぴくりともしない。

オレは和葉に掴みかかると、

「和葉っ返事せいつ！和葉っ和葉っ……かずはぁー！ー！ー！。」  
必死で叫んだ。

がくっ

和葉の頭が横に落ちる。

オレは大滝はんから、掻っ攫うようにして、和葉を抱きかかえた。

「な、何しとんねん！自分。はよ、目え開けっ和葉、かずはっ！」

揺らしても何の反応もない。

「……………やっ」

オレはぎゅっと和葉を抱きしめた。

和葉の体が冷たくならないように……少しでも血が止まるように……。

遠くに救急車のサイレンの音が聞こえた。

……オレの腕の中の和葉は羽のように軽くなっていた。



## 白羽（後書き）

和葉ちゃんは、刑事達の足音が聞こえたので、無理を承知で開閉ス  
イツチまで走り抜けました。自分がダメでも、銃声が聞こえるはず  
という考えがあったのです。

友

ひゅーっ

生ぬるい風がオレをまた不快にさせる。

・・・あれから2週間。

集中治療室の和葉はまだ目を覚まさない。

本当はずっとついていたけれど、オヤジに言われ、学校に来ている。でも、ただ来ているだけ。

一日の大半をこの屋上で過ごす。

和葉が隣にいないオレは、あの時から、魂が抜け落ちた。

今が昼なのか、夜なのかそれすら分からない時がある。

オヤジや和葉のおっちゃんに何を言われても、抗う気力もない。

9

「・・・かずは・・・。」

胸のお守りを握り締める。

オレの首にかけられた2人分のお守り。

あの時、お前は何を考えた？

オレだけ助かればええって思ったんか？

あんなに撃たれて、痛い思いして・・・。

・・・お前が隣にいないオレがどうなるかなんて、考えなかったん

か？

「和葉っ。」

ガンッ 手すりを思いっきり叩く。

和葉・・・和葉・・・和葉・・・

その時・・・、

がちやっ

ドアの開く音がした。

思わず後ろを振り向く。

「よっ。」

オレの学校の屋上にいきなり現れたヤツは、何事もなかったように右手を上げた。

「和葉ちゃんの病院に行ったら、オメーは学校だって言われたからさ。」

そう言って笑った友の顔が、ふいにぼやけた。

・・・あの日以来、オレは初めて涙を流した・・・。

友（後書き）

彼がやってきました。

## 涙色

「よっ。」

東京の友は、いつもどおりの様子で、オレに会いにきた。

「・・・工藤・・・。」

「オメー、やつれたな。」

「そうか・・・？それにしても、よう入れたな。」

「おう。「ごう」の得意だからな。」

くっくくくっ

工藤が笑う。

「なんで、ここに・・・？」

「さっき言ったじゃねえか。和葉ちゃんの病院に行ったら、オメーがここに居るから会ってつてくれて、オメーのご両親に頼まれたんだよ。」

「・・・ほづか。」

「そっだよ。」

相変わらずぶてぶてしい態度でヤツは言う。

工藤は、大変だったな、とか、頑張れよ。なんて陳腐な慰めは言わない。

こいつは、オレのことを和葉の次に分かってくれている。

「・・・工藤。」

「あん？」  
「……お前、和葉見て、どう思った？」  
「……」  
「……正直に言ってくれてええ。」  
「……お前と同じだと思う。」  
「そうか……。」

オレは空を見上げた。

「オレもわかつとんねん。……和葉は……オレが現実を受け入れられるまで、気持ちが悪く落ち着くのを待ってくれとんねん……。」  
「……そうか……。」  
「……ええ女やる？」  
「……ああ」  
「それが、わかってんのに……。こんな腑抜けとるオレのために……あいつ……。」

つーっ　一筋涙が流れた。

工藤もオレの横で、手すりにもたれて、空を見上げる。

「……和葉ちゃんは全部わかってたんだよ。」  
「……」  
「オメーが腑抜けるのも、何もかも。」  
「……そやるな……。」  
「だから、あんないっぱい管をつけられても、何度も手術を受けても、必死で生きてるんだよ。オメーのために。」  
「……ああ。」  
「頑張ったよ、和葉ちゃん。あんな細い体でさ。一生懸命……。」

「

工藤も言葉につまった。

「……だから……もう……、言っても、いいんじゃないかね？」

「……ああ……そ、そうやな……。」

最後は涙声になって返事にならなかった。

かずは……でも、まだ、オレ、言いたくないんや……なあ……  
まだ奇跡を信じたいんや……かずは……。

その時、ぶーぶーぶー 工藤の携帯が鳴った。

「はい。工藤……。はい、はい……。」

二、三言葉を交わすと、工藤は携帯をしまった。

工藤がオレの肩をぽんつと叩いた。

「……行こうぜ、服部。和葉ちゃんがオメーを待ってる。」

(……和葉……)

オレはもう一度空を見上げた。

オレの心に移すかのように、空も涙色に変わっていた。

## 絶対言いたくない言葉

病院についたら、病室の前に、和葉の両親、オレの両親が揃っていた。

和葉のオカンがオレを見て、立ち上がる。

「・・・平ちゃん、和葉に何か言っていて？和葉っ、平ちゃんのこと・・・待って・・・」

泣き崩れるおばちゃん。

「・・・うん。おばちゃん・・・。」

工藤に背中を押され、オレは病室に入った。

相変わらずたくさん管を体につけている和葉。  
真っ白な顔の和葉。

・・・あの太陽のような笑顔はもう見られない。

オレは、布団の上から和葉を抱きしめた。

あの時よりも、もっと体は細くなっていた。

前髪をかき上げ、そっと額にキスをする。

「・・・和葉・・・しんどかったなあ。ありがとっな・・・オレのために・・・。」

ぼとり。涙が落ちる。



「くっ……た、助けてくれて、ありがとっつて言いたいところやけど……お、お前おらんで、オレはどうすればええん？」

ぼとりぼとり

シーツに涙のしみができる。

「……何発も撃たれて……痛かったなあ。それなのに、しんどいよな……こんなにつけられてな……。なあ。痛いなあ……」  
和葉。」

ぽたっぽたっ

涙が止まらない。

「……マスク、ちよつと外してもええですか？」

下を向いたまま、後ろにいる看護師さんをお願いする。

「ずらただけなら……。」

本当はだめなんやろうに、そう答えてくれた。

オレはそつとマスクをずらす。

「……和葉……誰よりも愛しとるで……。」

そう言って、キスをした。

初めてのキスは、少し冷たかった。

少しでも暖めてやりたくて、ずっと唇を合わせていたかったけど、看護師さんに迷惑をかけてはいけなから、すぐ、マスクをつける。

そして、痩せ細った体を抱きしめ、耳元で囁いた。

「・・・やから・・・全然大丈夫やないけど・・・嫌やけど。本当に本当に嫌やけど・・・」

涙が止まらない。

ぎゅっと和葉を強く抱きしめる。

「・・・もう、逝ってええで？和葉・・・。はよ楽になり？」

オレが泣きながら撫でた和葉の顔が、少し微笑んだように見えた。

ピッピッピッピッー.....

「・・・かつ、和葉っあああああつ。」

・・・この日、オレの一生の恋は、終わった。

絶対言いたくない言葉（後書き）

和葉逝く・・・。

再開（前書き）

平次20歳

## 再開

和葉が逝ってしまったから、オレは全てが終わった。でも、和葉にもらった命を捨て切れなくて、後追いもできない。

ただ、和葉に見せれなかった未来を、和葉の写真に教えてやるために、生きる毎日。

そんな風に生きていた、大学2年の時。

工藤が黒の組織と決着をつけることになった。

オレはもちろん工藤についていった。

工藤を助きたいという気持ちはもちろん、和葉のところにいけるかもしれない。という少しの期待もあって……。

やから、組織の施設で、宮野のねーちゃんと工藤と3人追い詰められた時、迷うことなく2人を庇った。

「服部っ」

「服部君っ」

オレに駆け寄る2人。

「だ、大丈夫や……」

そう答えるオレに

「私なんかを何で、庇うのよっ！」

叫ぶ宮野。

「……お前らは……まだ……楽しめる未来があるやろ……」

やから……」

意識がだんだん遠くなる。

(ああ……痛いなあ……)

オレの名を必死に呼びながら、オレの顔を覗き込む2人の顔が小さくなっていく。

(……和葉、ひよつとしてお前に会えるのかなあ……)

オレは、小さく笑って目を閉じた……。

平次〜平次〜

ああ、この声……和葉や……

会いたかったで。平次。

(オレもや。)

オレは和葉を抱きしめる。

すると、和葉がオレの傷に気づいたのか、

痛いん？平次。

泣きそうな顔で、傷を触ってきた。

(お前がいてくれたら、痛くないで。)

よかった・・・

(やから、はよ、お前んとこ連れてってえな。)

ふふふ。それは、まだやなあ。

(何で!?! やってこんな傷があるんやで。)

あはははは。何言つとん、平次。

和葉はオレが一番好きな笑顔を見せた。

平次、どこも怪我しとらんで?

(えっ?)

あわてて体を見る。

(・・・ほんまや・・・傷がなくなつとる・・・)

な?そやろ?ほな、またな。

そう言つと、笑いながら和葉が駆け出した。

・・・行ってまう・・・また、和葉がオレを置いて行ってしまふ。

(和葉っ)

オレは必死で追おうとするけど、あの時のように、足が動かない。

（かずは・・・和葉・・・和葉あっ）

小さくなる和葉の後姿にむかって必死で叫び続けた。



## 孤独

「……か……かずは……かず……はあ……。」

意識がないはずの服部が、和葉ちゃんの名前を呟いている。

「……服部……。そこに来てるのか？和葉ちゃんが……。」

オレは思わず呼びかける。

「和葉ちゃんっ。」

横で蘭が泣き崩れた。

あの宮野ですら、泣きすぎて立っていられない。

あの時……。

宮野は自分が犠牲になると立ち止まった。

それに気づいた俺が、宮野に駆け寄り、それを服部が立ちはだかつて、俺達を助けた。

駆け寄った俺達にむかって、お前らには、まだ楽しめる未来がある  
と言って笑った、服部。

……服部、まだ死ぬなよ……死んだら許さねえからな……オ  
メーにも楽しめる未来はあるんだよっ。

ピッピッピッ

服部の心拍が弱くなる。

「服部？服部っ！」

医師が慌てて服部に心臓マッサージを施す。

俺は後ろに下がって、それを見守ることしかできない。

・・・お願いだ・・・和葉ちゃん、まだこいつを連れていかないでくれっ・・・

祈るように、自分のコブシを握り締める。

・・・お願いだ・・・和葉ちゃん・・・和葉ちゃん・・・

ピーッ

・・・和葉ちゃんっ・・・

「服部っ！」

.....

「和葉あつ」

オレは、自分の叫び声で目を覚ました。

目の前には、オレを心配そうに見つめる、みんなの顔。

「.....和葉は？」

その問かけに、工藤が辛そうに顔を歪める。

.....そっか.....和葉はまたオレを置いていったんやな.....

ぎゅっと目をつぶる。

オレはまた一人になった。

生きる(前書き)

平次27歳。探偵。

## 生きる

「久しぶりやな。和葉。」

オレは和葉の墓に声をかけた。

「忙しうてな……。堪忍な。」

墓前に供えられた、キレイな花が、頷くように揺れる。

その後ろに嬉しそうに笑う、和葉の姿が見えたような気がした。

……。20歳の夏、和葉はオレを連れて行かなかった。

あの時、オレは、この生が終わるまで……。和葉がオレを迎えにくるその日まで、一生懸命生きようと心に決めた。

そして、オレは結婚し、子供もできた。

……。でも、オレの中の和葉は、17歳のまま。オレの恋も、あの瞬間で時を止めている。

それは永遠に変わらない真実。

オレは和葉の髪を撫でるように、墓石を撫でた。

「そうそう……。宮野のねーちゃんどこにも、女の子が生まれてな。名前は『かずは』やって。」

オレはそこに和葉がいるかのように話しかける。

「工藤んとも『一葉』<sup>かずは</sup>やる？俺んちもやる・・・どの『かずはちゃん』が一番かわいいやるな？」  
オレはおかしそうに笑う。

・・・あの日。

助けてもらったことを、オレに泣きながら詫びる宮野に、

「和葉とオレに繋がる命をやったんやから、大事にしてな。」

オレは笑いながら言った。

それを覚えていてくれたのだろう。

シングルマザーになった宮野は、その愛し子に「かずは」と名づけた。

それより前に女の子ができた工藤も、自分の名を一字とって「一葉」<sup>かずは</sup>。  
。「くどうかずは」って工藤と和葉が結婚したみたいで、本気で嫌やったけど。」

オレの三番目にできた娘にも『和葉』

「『服部和葉』か・・・ほんまは、お前にそう名乗って欲しかったんやけどな・・・。」  
オレは目を細めた。

「でも、ま、次でええか・・・。ほな、和葉また来るから。腹出して寝るなよ。」

あの頃のように声をかけると、オレは立ち上がった。

それに返事をするように、また花が揺れていた……。。

## 迎え（前書き）

平次60歳。末期の肺がんで療養中。



## 迎え

・・・お父ちゃん・・・お父ちゃんってば！・・・

ああ・・・この声は・・・和葉やな・・・

オレはうつすらと目を開ける。

そこにはオレの娘の和葉の顔。

「・・・もっつ、お父ちゃんっ、しっかりしてえな！」  
ペシッ オレの頭を叩く。

その口調とは裏腹に、やたらめったら気が強いこの娘の目に、涙が溜まっている。

(・・・また、気を失ったんか・・・)

オレはぼんやり考える。

横から長男が

「オトン、工藤はんが来てくれたで。」  
そう言った。

「工藤か・・・。」  
目を動かすと、

「おう。また死に掛けたって？」  
相変わらず若々しい顔で、工藤が笑っていた。

「・・・もうそろそろみたいだな。」

オレは次男の手を借りて、よっころせと体を起こす。

「まだ、早いんじゃないか？」

「そんなこと、ないで。・・・あ、そうそう、工藤。」

「ん？」

「例の物、オレの棺おけにちゃんと入れてな。」

「ああ。わかつてる。」

工藤が真剣な顔で頷く。

・・・例の物。

オレがこいつらの母親と結婚する時、オレは和葉の遺品を工藤に預けた。

写真、リボン、そして・・・日記のような手帳。

和葉のオカンから手渡されたそれは、毎日の出来事が書き込まれていて、どれにもオレのことが綴られていた。

『今日平次の試合があつた。当然勝つた！すごい平次！』

『平次が事件を解決！さすが平次！』

『平次に告白したら、前にいなかった・・・情けな・・・。』

短い文章やったけど、本当に毎日毎日、和葉はオレのことを考えていてくれた。

オレは、和葉が居ない日々を生きていくため、何度それを読み返し

たことか……。

あの頃を思い出して、オレはふっと笑った。

「……アレ、持ち主に返さんといかんぞな。」

「ああ。……ちゃんと入れてやるよ。」

工藤が笑う。

「頼むで……。ほんま。」

オレも笑った。

そんなオレ達のやり取りを、娘の和葉が不思議そうに眺める。

ふわり。

和葉のポニーテールが揺れた。

オレはこの娘に、『和葉』と名づけ、ポニーテールに髪を結び、合気道を習わせた。

オレのオカン似の美しい顔をじっと眺める。

「……和葉……」

「なん？」

「……すまんかったな……」

「はっ？」

……小さい頃、この娘は、合気道が嫌だとよく泣いていた。

オレ似の息子達にも目を向ける。

「……それから……お前らにも……こんな父親ですまんかったな……」

「オトン何言うてん！」

「ボケたんか!？」

・・・お前らには、厳しいだけの父親やった。

「お前らにも・・・お前らの母親にも・・・本当すまんかった・・・」

・・・この子らの母親は、こんなオレに愛想をつかし、第二の人生を歩いている。

「工藤・・・こいつら頼むな・・・。」

・・・最期までお願いばつかですまんなあ。

工藤が頷く。

「・・・ほんま、みんな、すまんかったなあ。」

オレはそつと目を閉じる。

「・・・かずは・・・。」

オレはまた気を失った。

・・・へーじー・・・平次いー

遠く向こうから、誰かが走ってくる。

あははははは。平次やつ！平次い！

ああ、オレの和葉や。楽しそうやな……。

お疲れ様やったな！平次！

（おう、疲れたで。待ちくたびれたわ。）

ごめんなあ。ほな一緒に行こうか？

（ああ。もう置いていかんでな……。）

ぎゅっ 和葉がオレに抱きつく。

これからは、ずっと一緒やね。

（ああ、そうや……一緒や。）

色々話したいことあるんよ……あのな……

（おう……なんや？）

何か楽しい夢を見ているのか、服部が穏やかに微笑んでいる。

「……お父ちゃん？」

服部の娘の和葉ちゃんが、服部をゆすった。

服部の顔に、一筋の光が落ちる。

「・・・和葉ちゃん・・・」

オレは光の中に、あの日の彼女の姿を見た。

「何？工藤のおっちゃん？」

「あっ・・・ああ・・・和葉ちゃん、服部の和葉ちゃんが来たみたいだから、少し寝かせてあげよう。」

オレはそう言うと、何を言うのかと首を傾げる三人を促して外に出た。

オレはそっと後ろを振り返った。

服部に柔らかい光が降り注いでいる。

その光の中に、あの頃の2人が楽しそうに笑っているのが見えた。

・・・待っていてくれてありがとう・・・和葉ちゃん

オレはそっとドアを閉めた。

## 迎え（後書き）

イメージは「フランダースの犬」の最終回！

そして

ちーんちーん

仏様の鐘の音や・・・

そうか・・・オレ死んでもうたんやんな・・・

「あれ？和葉？」

オレは慌てて辺りを見回す。  
和葉がどこにもいない。

どこ行つた？和葉。一緒におる言つたやないかっ

「和葉っ和葉っ・・・」

やっぱり、どこにもいない。  
またオレを置いていくんか!？

「かずはあああああああ。」

.....



「……平次……平次……平次いつ！」

ひどく揺すられて目が覚める。

「か、かずは……？」

目を開けると、目の前いっぱい広がる心配そうな和葉の顔。

「大丈夫？平次。何やひどう、うなされとったで？」

「……オレ……ああ……そうか……」

……夢か……

まだぼーつとしとるオレに、和葉が問いかける

「ほんま大丈夫？」

「あ……ああ、何や夢見とったみたいやな。」

「夢？」

「……そう、大河ドラマみたいな壮大な夢。」

「はあっ？」

和葉が片眉を上げる。

「いや〜しんどかったわ。」

オレはほつと息を吐く。

「そうやるうなあ……。すっごいうなされとったもん。」

和葉がオレの前髪をそつとかき上げる。

「ほんま、きつかったんやで。」

げっそりするオレに、

「お盆に仏間で、お参りもせんで寝とるからやないの?」「和葉は、けらけら笑いながら、オレをちやかす。

そう言う間にも、和葉の手はオレの髪をいじっている。

オレは、黙ってその手を掴んだ。

「・・・お前こそ、奈良のばあちゃんの墓参りはすんだんか。」

「・・・うん。」

「そうか・・・。」

その白い手の甲に口付ける。

「・・・へ、平次?」

和葉が慌てる。

・・・もうこの手を離さない。

「あんな・・・。」

「う、うん?」

「お前、ひよつとして・・・手帳のダイアリーんとくに、毎日オレのこと書いとる?」

和葉はぼつと、真っ赤になった。

「なななな・・・み、み、み、見たん?いいいい、いつ?」

その顔が面白くて、オレは大笑いした。

そして、もう一度、その手に口付ける。

「・・・夢で、ちよつとな・・・。」

あれほど騒いでいた和葉がきよとんとする。

オレはまた笑って立ち上がり、その手を引いた。

「ほな、行こうか。」

「う・・・うん。」

オレ達は2人手を繋ぎ、一緒に歩き出した。

ぎゅっ

力を入れて握りなおす。

「・・・もう離さんで、和葉。」

オレはその温もりにそっと呟いた。

そして（後書き）

はい！終わりです。迷ったんですが、やっぱり夢落ちにしました・・・  
。。お盆だけにこんな悲しい話が浮かぶ浮かぶ・・・。  
ちなみに、この2人まだくっついてません。和葉ちゃんは、まだ平次が寝ぼけてると思ってます（笑）  
でも、平次の中で、何かがはっきりと変わって、次作「岐路」に続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8629v/>

---

散華

2011年10月9日11時46分発行